

きょうと福祉倶楽部だより

2022年 11号

チームワークがいのちの炎をとりもどすーハツエさんのドラマから

75歳のハツエさん。

居を長岡京市に構えて暮らしています。

長年連れ添った方との永久の別れののちはひとりで暮らしていらっしゃいます。

そのハツエさんをきょうと福祉倶楽部が関わったのは今年の8月から。

前任のケアマネージャーさんの退職に伴い当事務所に支援の依頼があった方です。引継ぎ当初は定期的通院もままならず、当然お薬も飲んでいませんでした。

そんな暮らしはまるで綱渡り。

お食事もお店屋物だけ。

「これでは健康の維持は難しいなあ」とおもっていた矢先に、彼女の身体の機能がどんどん落ちてきました。

ヘルパーが訪問するとトイレが間に合わなくて失禁。ベッドから落ちたまま動けないなど日々が事件の連続。

すぐに医師との関係などを作り直して体制変更。

そして分かったのは小さな脳梗塞がたくさんあること。それだけならば自宅での暮らしは改善出来るはずでした。ところが彼女が通う通所介護の現場でコロナが発生。

その感染がハツエさんにも襲いかかりました。通所介護が自主的にやった検査で分かったのです。

脳梗塞にコロナ。これは一時的にも入院が必要でした。

そこで救急要請。救急車はすぐに出動してくれました。ところがコロナの発生届がでていないハツエさんの受け入れ先は見つかりません。

主治医の先生には時間外で連絡を取れないなか、発生届を出すこともできません。何時間も救急車は立ち往生です。救急隊のメンバーの表情にも疲労がにじみ出ています。

なんとか知り合いの先生に依頼し、救急車の中での抗原検査でようやく発生届が出せました。救急車が出発出来たのは依頼から4時間以上が立った深夜。そんな綱渡りの後にお家にハツエさんは病院から戻ってきました。

退院当初は歩くこともおぼつかない状態でした。プランをさらに見直し。当初週二日だけのヘルパー支援と週一回の通所介護から現在ハツエさんを支えるメンバーは訪問介護が2事業者で毎日支援、訪問看護、通所介護(週3日)へと膨らみました。

あれから三ヶ月がたちました。

朝の支援を終えたヘルパーが声を弾ませて事務所に戻ってきました。

「ハツエさん自分で今朝はトイレに行っていた!」と。

これまでポータブルトイレの利用しかできなかったハツエさんが知らぬ間にここまで回復していたのです。

要介護4まで落ちていた彼女の今はおそらく今認定を受けたなら数ランク低くなると思われます。

そこまで彼女のいのちの泉をふたたび湧き上がらせたのは多くの介護スタッフのチームワークと医療の力です。

わたしたちの仲間が厳しい環境のなかがんばっているのはこんなドラマが日々生まれるからです。